

「感情・気分の異常」は2つの章、すなわち、「1. 感情・気分の概念」と「2. 感情・気分の異常」で構成されている。この著作が『精神医学エッセンシャル・コーパス』の1章として後世に伝えるべきと判断された理由は、次の2点ではないかと推察する。

その1は「感情・気分の概念」で論じられている「感情とは何か、気分とは何か」という問いに対する心理学、異常心理学、哲学のすべてを動員した柴田の精緻な考察がきわめて貴重なものであるからである。柴田はまず、心理学者からはなんら「感情」の概念は引き出せないと言い切った後に、「精神医学者の答え」として、Schneiderの「感情とは、直接に快または不快として体験される、受動的な自我の状態である」という定義を引用した。SchneiderはSchelerの「成層説的感情分類」を引用し、そのなかで生氣感情(vitale Gefuhle)、情動、両価的感情(ambivalent)、Affekt(身体的随伴症状のある反応性心的感情)、気分(Stimmung; 比較的長く持続し、必ずしも反応性とは限らない感情状態)など、後の精神病理学の用語として定着した重要な概念を整理している。この「精神医学者の答え」は今日でも精神医学の教科書に登場するものであり、われわれの世代(DSM-III以前)には馴染み深いものであるが、精神病理学が論じられなくなった最近の精神科医には新鮮に響く部分があるかもしれない。さらに柴田はこの「精神医学者の答え」にも「感情とは何かという疑問に答えてくれない」とし、哲学者Klagesにその答えを求めている。恐らくKlagesの感情理論をこれだけ詳しく読み説いた精神医学者はさほど多くないであろう。その意味でこの章の価値は大きいものと思われる。その内容については、この章をじっくり読んでいただくこととし、あえて内容には立ち入らないことにするが、Klagesの感情の模式図(p271)と柴田がKlagesの感情理論を整理した図表(p274)のみ、ここに示しておきたい。

その2は「感情・気分の異常」において感情・気分の異常の諸側面が、これもまた柴田の性格を表していると思われるほどきめ細かな解説によって描かれている。そして、ここでもKlagesの感情理論をもとに感情・気分の異常が解説されている。なかでも「躁うつ病のうつ情態(状態ではなく情態を用いている点がユニーク)」「躁うつ病の躁情態」は柴田の最も得意とする分野であるだけに、その記述は実に細かく具体的で読みごたえがある。「躁うつ病のうつ情態」のなかで注目したい点は「抑うつ気分と制止とは分かちがたい」という記述である。DSMの診断基準が個々の症状の関係は問題にせず、症状の個数を根拠に診断する際にしばしば陥りがちな傾向、すなわちたとえば「抑うつ気分はあるが制止はまったくないうつ病」に疑問がもたれないで診断が下されることへの警鐘ともいえる記述は貴重である。

以上、「感情・気分の概念」「感情・気分の異常」の概略を述べたが、最近ではこのような精神現象の概念が論じられることが少なくなり、表面的な用語のみが飛び交う時代になって、これから精神医学を学ぼうとする若手には是非、精読してもらいたい内容である。

(樋口輝彦)